

## 新たな生涯音楽学習の組織

### へ向けて

〔成人音楽学習と学校音楽教育の互酬性を視点として〕

聖徳大学教授  
八木 正一

### 1 わが国の生涯学習

1960年から本格化した日本のめざましい経済復興は、1968年には日本をGNP（国民総生産）世界第2位の経済大国に押し上げた。こうした状況をも反映して、そろばん、習字、ピアノを中心とした子どもたちの学校外の習い事は急速に増えていくこととなった。また、70年代になると大都市を中心に、民間の学習機関であるカルチャーセンターなどが開設されるようになり、成人を中心とした学習者が多く見られるようになった。

このような動きをいっそう加速させたのは、1990年（平成2年）のいわゆる生涯学習整備振興法の制定である。これによって、生涯学習という考え方が一気に定着することとなり、公民館や生涯学習センターなどの地域の社会教育施設も充実していった。この背景には、80年代後半からの週休2日制の定着による時間的余裕の増加という点も見逃すことはできない。ところで、今さらではあるが、生涯学習という言葉について確認しておこう。周知のように、ポール・ラングラン（Paul Lengrand）

が1965年に「Life-long integrated education」つまり「生涯教育」という考え方を提唱した。こうした考え方は日本にも紹介され注目を集めることとなった。その後、昭和62年（1987年）の臨時教育審議会答申（教育改革に関する第4次答申）において、生涯教育は生涯学習という言葉に改められ、以後、生涯学習として定着していくこととなった。

生涯学習は、その言葉どおり、生涯にわたる学習という意味である。長い間、私たちの社会では、「学習は学校で」という考え方が当たり前であった。生涯学習はそうした考え方を大きく転換させ、人間は一生学び続ける権利をもった存在であることを内外に示すものとなった。

私は、生涯学習を「一生にわたって自己をみがき、私たちの社会や地域に積極的に働きかけ、そのことによって自己の価値観や能力を不断に紡ぎなおす営み」と考えているが、いずれにしてもそれは、

子どもから成人という生涯のステージを貫く学習という意味を持つものにかわりはない。

### 2 学校教育と成人の学び

とは言え、私たちが生涯学習という場合、それは学校教育や子ども以外の学校外での学習ではなく、暗に成人の学びを指している場合が少なくない。まだまだ、学校教育を中心とした子どもの学習と成人の学習を区別して考える意識はわが国では根強いと言わなければならぬ。こうした考え方のひとつの源流は、アメリカの成人教育にもあるのではないかと私は考えている。

1967年、ノールズ（Knowles, M.S.）はアンドラゴジーという言葉を使い、成人教育の重要性を提唱した。アンドラゴジーとは、ギリシャ語の「成人」（andros）と「指導する」（agogos）の合成語である（池田・1987『成人教育の理解』実務教育出版）。ノールズは、子どもの教育学を意味するペダゴ

ギー (pedagogy) に対置する形でアンドラゴギーを提起した。こうしたノールズのアンドラゴギーの基礎となっているのは、成人の特性の理解にある。ノールズは、成人の特性をつぎの4点にまとめている。

①人間が成熟するにつれて自己概念は、依存的なものから自己主導的・自己決定的なものへと移行する。

②成人が蓄積した経験は学習の大きなリソースとなる。

③成人の学習へのレディネスは、その社会的役割や社会的発達課題を遂行しようとするところから生じる。

④学習の方向づけは、生活中心、問題中心であることが多い。(ノールズ、堀薫夫・三輪建二訳『成人教育の現代的実践―ペダゴギーからアンドラゴギーへ』2002年、鳳書房)

こうした4つの特性は、成人学習の特長と連動することとなる。成人の特性は自己決定的であると

いう第1点目の特性は、成人の学習はその開始から終了まで自ら決定するというところに特長をもつべきあるということを目指すことになる。特性の第2点目は、成人はそれまで人生で蓄えてきた多くの経験をもっている、だから、その経験を活かす形でその学習を展開されるべきであるということを示唆する。

特性の第3点目は、成人の学習は現実的な課題や問題点への解決策を見出すためや自己実現のために行われることを意味することになる。そして、成人学習は、学校での子どもの学習のように将来のために学ぶのではなく、現在をよりよく生きるために行われるという成人学習の目的に関連するのが上の4点目の特性である。

このような成人の学習は、今の生活に役立ち生活を豊かにするよきなテーマを自ら選び、その学習方法などについても自ら決定し、自分の経験を活かして行われる学習ということになる。それに対

して、社会人となるために必要な内容を教師の周到な計画や指導技術によって学んでいくのが、学校での子どもたちの学習ということになる。

やや単純化した形ではあるが、このように成人の学習と学校教育の違いを浮きだたせてみると、じつは、お互いに学びあう点が見えてくる。そのうち、とくに重要だと思われる点をまとめてみるとそれは大きくつぎの3点になる。

①学びの自発性・自己決定性と学びへの参加

②学びの相互主体性

③教育技術の意識性

### 3 学校教育の非参加性

先に、成人の学びは、「今の生活に役立ち生活を豊かにするよきなテーマを自ら選び、その学習方法などについても自ら決定し、自分の経験を活かして行われる学習」と粗くまとめてみた。成人の学習の過程は、自ら学びたいことを指導者の援助をもえながら、学

習者自らが決定していく形でつくられていくのである。

これを言い換えれば、成人の学習は、学びの過程づくりに学習者自身が参加する形で行われる学習ということになる。この学びの過程への学習者の「参加」というあり方は、じつは大きな意味をもっている。なぜなら、学びの過程への学習者の参加が、学習の自発性や自己決定性を生み出すからなのである。

この点に関して学校教育を振り返ってみよう。学校教育においては、学習の過程づくりに子どもたちも学習者が参加することはあまりない。学習したいこと、学習すべきこと、つまり教育内容に関しては基本的に教師がすべてを決定する。そして、どんな教材を使って学習するのか、どんな活動によって学習を進めるのかなども、それは基本的に教師が決定することがである。

ここに、学校教育が成人学習から学ぶべき点がある。子どもたち

を主体的な学び手へと育てるために、できうる部分で、学習の過程づくり子どもたちを参加させることが学校教育を変える大きな視点になりうるのである。(こうした点については、たとえば子安潤『学び』の学校―自由と公共性を保障する学校・授業づくり』ミネルヴァ書房を参照されたい。)

もちろん、社会人となるための基礎的な力を身につけさせる学校教育の役割という点からすれば、たとえば読み書き算に類した基本的な教育内容が、子どもたちの要求とはかかわりなく学校で用意されることは当然でもある。しかしだからといって、教育内容の決定に子どもたちが参加することがまったくできないわけではない。生活科や総合的な学習の時間を想像してみるとそのことはよくわかる。

こうした学習では、何を学ぶのか、どのような教材で学ぶのか、どのような方法で学ぶのかなどを子どもたちが決定する場面は比較

的が多い。

じつは、音楽科においては、こうした子どもたちの学習学習過程への参加を考える余地は他の教科に比べて格段に多い。たとえば、どんな教材で合唱をしようかといったようなことを決定する場面に子どもたちを参加させる、言い換えれば子どもたちと教師とが共同して学習する教材を決めるといったことは簡単に実現できる。学習の方法についてももちろん同様である。

先にも述べたように、こうした学習過程づくりへの学習者の参加は、学習の自主性や自己決定性、そして学びのたのしさを生み出す。このような点に関して、学校教育が成人の学習から学ぶべき点が多いのである。

#### 4 相互主体的な学び

成人を対象にしている指導者から、「大人を相手にする時には、対等な人間としてかわかることを大切にしている」といった話をよ

く聞く。先に述べたように、成人の学習者は、豊かな経験をもったひとりの人間ということからすれば当然のことでもある。

これに関しても学校教育が学ぶべき点がある。学校教育においては、「子どもの自発的な学習」だとか「教師から子どもへの一方通行的な教え込みをやめよう」といった課題がよく聞かれる。こうした点が課題になるにはそれなりの理由がある。

教師は子どもより格段に年長であり、また、子どもに比べれば物事をよく知っている存在であり、評価権をもっている。こうした教師の存在が、いつのまにか、教師と子どもとの間に権力関係をつくり出し、そのことによってその指導が一方通行的な性格をもつことになる。こうした状況をどう変えるのかということは、ここ30年来の学校教育が抱える大きな課題の一つでもある。

そうした課題の解決を考える際、学習者を指導者とが対等な一

人の人間としてかわりあい、学習者の経験を重視しそれをリソースとして学習を組織するという成人の学習は大きな示唆となる。こうした学習のあり方は、お互いを

主体とみなす学習と言い換えることもできる。お互いを主体とする関係とは、「人間として対等な立場で、それぞれを尊重しつつ、それぞれの能力を出し切ってかわる関係」とでも言えよう。学校教育をそうした観点から組み直すという方向にかかわって、成人の学習から学校教育が学ぶべきは大きいと言わなければならない。

#### 5 教育技術を学ぶ

逆に成人の学習が、学校教育から学ぶべき点もある。

子どもたちは、成人と違って必ずしも自らが学びたいことを学ぶわけではない。だから、教師は、学ばせようとする(教育内容)を子どもたちが学びたくなるようにさまざまな工夫を行う。どのような教材を使うのか、子どもたち

が学習に身を乗り出すようにどのよう学習活動を組織するかといった点については、学校の教師はまさに専門家としてのリソースや技術を持っている。つまり、教育方法的な専門性をもっているのである。

成人学習の指導者には、こうしたリソースや技術がややもすると不足しがちである。なぜなら、そのような指導の工夫をしなくても、自らが学びたいことを学ぶ成人の学習者は、基本的に自主的な学びを展開してくれるからである。だから、成人学習の指導者から教育方法的な専門性への関心が薄れがちになる。このような教育方法的な専門性の欠如は、自らが学んできた古い方法を成人の学習者に押しつけてしまうという悲劇を生むことがある。自分が習ってきたように学習者に教える、そのことよって学習者の不満を生み出すと言ったことが起こりうるのである。

以上、3点に絞る形でまとめて

みた。このように考えてくれば、お互いが相互に学び合う点が見えてくる。まさに学校音楽教育と生涯音楽学習がお互いに学び合っていくなかで、子どもから成人を貫く生涯学習論が見えてくるのである。

## 6 生涯音楽学習の今後

わが国の教育関連予算は他の先進国と比べるとかなり低い。よく指摘されることである。このような状況が続いていくかぎり、学校音楽教育は今後も縮小していくと考えなければならない。それにつれて、学校音楽教育が担っている部分が徐々に生涯学習として位置づけられていくようになることも想定しておかなければならない。

そうした中、学校教育、成人の学びといった相対的な区別をやめ、まさに生涯学習として音楽教育を位置づけていくことがさらに重要となってくると考えなければならない。そのためには、これま

でに述べてきたように学校教育、成人の学習がそれぞれの特質や良さから学び合い相互に連携を持ちながら生涯音楽教育を担っていくという意識をもつ必要がある。とりわけ、生涯学習の基礎を担う学校教育では、生涯にわたって学ぼうとする意欲を養うことをさらに重視しなければならない。それは学校で音楽の学びのたのしさを保障することからしか生まれない。

一方、成人を対象とした生涯音楽学習のステージの新しい側面も意識しておく必要がある。これまでの生涯音楽学習は、音楽に関する何事かを学ぶという形で行われるのが一般的であった。したがって、その指導者に要請されたのは、その学びをどうつくるのか、つまり、どのように学びを支援していくのかという指導に関する資質であった。

もちろん、そうした生涯音楽学習の構造は維持されていくであろう。しかし一方で、何事かを教え

学ぶというよりむしろ、自分たちで音楽活動をつくりだし、他の人々とそれを通してつながっていくといったことが生涯音楽学習の大きな部分を占めていきつつあることも見過ごしてはならない。

このように考えるならば、さまざまな音楽活動をどうつなぎ、そこからまた新しい動きをどうつuckingかという、いわばコーディネートとしての役割が生涯音楽学習の指導員に問われることになるはずであろう。

行政においてもこうした能力をもった人々への期待が高まっていることになる。このような点からすれば、本誌の発行母体である音楽文化創造で新しく養成する「地域音楽コーディネーター」が重要な役割を果たしていくことになる。この養成講座については財団のホームページをぜひご参照いただきたい。